

浜名湖ロマン・十景

遙かなる歴史ロマンを求めて!



古代航路・伊良湖岬



古代の浜名湖は、『古事記』や『日本書紀』
に書かれている神話の世界の舞台だったのかもしれない。

時を経た今、世界一の湖として悠然と未来を
見つめている。



NPO法人浜名湖クラブ



浜名湖は、古来多くの人々の往来があり、特にいにしえの情景は歌としても残されている風光明媚な土地柄である。また不思議な事でもあるが、浜名湖周辺からは歴史的な偉人や世界企業が、集中的に生まれ育つ土地柄でもある。

これらの事柄は、浜名湖周辺の歴史的な積み重ねが大きいと思われるが、今となっては、その真意を知ることは出来ない。唯、歴史的に見ると、縄文時代から三遠南信はもとより、日本の内陸深くからも人々の交流があり、海洋に於いても、遠方の島々と交流してきた事が影響しているようである。

特に古代浜名湖に於いては、遺跡や伝承等により現代人が想像する以上に、頻繁に船を活用した人々の交流があったことが伺える。

そうした人々の交流により、日本国の形成時に大きく寄与するような歴史的なドラマが、時に激しく、時に優しく、この浜名湖に於いて繰り広げられていたようである。まさに真実に近づきたいと思う浜名湖ロマンの世界である。

この度、浜名湖ロマンの視点で、変わりゆく自然景観に思いを馳せると同時に、古代の人々の感性に触れる良き機会として浜名湖ロマン十景を作成した。

浜名湖ロマン十景

- | | |
|--|---|
| 1. 弁天島と今切舞阪港。
(神話・大国主命を蘇らせた舞阪の地！) | 2. 内浦と曾許乃御立神社。
(出雲の国譲り神話の舞台は浜名湖か！) |
| 3. 井の国と天白磐座遺跡。
(浜名湖を支える水の神・天白磐座遺跡！) | 4. 細江神社と漕標(みおつくし)。
(渡来人の香り漂う古代港、細江！) |
| 5. 浜名神戸と浜名惣社神明宮。
(伊勢神宮の遷宮候補だった三ケ日の地！) | 6. 瀬戸と猪鼻湖神社。
(猪鼻湖は“井の国の花の湖”だったのか！) |
| 7. 嵩山とトキワマンサク。
(古代の嵩山は神事の発祥地だったのか！) | 8. 江尻鼻と瞳水面。
(先を見通す力が宿る浜名湖の瞳水面！) |
| 9. 白須賀と浜名川。
(安らぎと運が舞い下りる白須賀の地！) | 10. 新居浜と浜名橋。
(古代・東海の景勝地だった幻の浜名橋！) |

1

弁天島と今切舞阪港・編

神話・大国主命を蘇らせた舞阪の地！

■蘇りの力を持つ舞阪、弁天島

舞阪や弁天島一帯は、現在の発掘調査や海底遺跡の発見などから、弥生時代の生活道具等が見つかり、昔から人々が暮らしてきたことがわかる。

そして遠江と呼ばれた以前から現在まで、文献を見る限りこれほど地形が変わった所も珍しい。そうした点で、東西を行き来する旅人の舞阪や弁天島一帯へ印象は、その時代ごとに異なる景観があり、感慨にも大きな違いがあったと思われる。



(今切に架かる浜名大橋)



(浜名湖の弁天島湖畔)

それだけに、環境が大きく変化するこの地に於いて、その変化にも挫けず、前に進もうという気概が生まれる土地柄であり、その要因には千年以上前からあったとされる岐佐（きさ）神社の存在が大きいと思える。

この神社は明応7年（1498年）の地震と津波により、社殿の一部が現在地に漂着し、その場所に社殿を建てたとの事であり、それ以前の岐佐神社が何処にあったかは現在も不明である。同時に浜名湖の南部に今切が出現し、太平洋と繋がるようになったのもこの時である。



(岐佐神社の鳥居)



(岐佐神社本殿)

この岐佐神社は古事記の“因幡（稲葉）の白兔神話”に登場する大国主命が焼死した後に、蘇らせた蛸貝比賣命（きさがいひめみこと）と、蛤貝比賣命（うむかいひめみこと）を祭神とする極めて珍しい神社である。



(境内にある赤猪石＝赤岩)



(赤猪石＝赤岩の御由来)

また、八十の神に転がされ死に至らせた真っ赤な焼き岩（赤猪石）は、現在も岐佐神社に祭られている。このように舞阪や弁天島には日本建国の大国主命を死から蘇らせた神話の痕跡が、現在でも色濃く残っている。

【出雲神話と重なり合う舞阪の地】

古事記の“因幡（稲葉）の白兔神話”は日本で広く語られているもので、白兔を助けた後に、八十の神に妬まれ、転がされた真っ赤な焼き岩に押しつぶされ大国主命が亡くなるというもので、その後、蘇らせたのが、岐佐神社の二人の女性の命（みこと）である。

この大国主命が亡くなるという“因幡（稲葉）の白兔神話”は、鳥取県の浜辺の“気多”から始まり、“稲葉”（鳥取県）そして“木の国”（紀の国＝三重県北部、和歌山県）に向かう途中の出来事とされている。

しかし、この話は鳥取県の浜辺から突然、木の国の三重県や和歌山県の浜辺に向かう事であり、極めて不自然な順路である。

これは出雲神話であるが、この舞阪の地に二人の命（みこと）が祭ら

れている事や地理的な順路から考えると、実際に大国主命の蘇りの地が舞坂であると理解した方が極めて自然な感じがする。

この大胆な仮説の理由としては、舞阪より東側の比較的海に近い静岡県に、“気多”（春野町）や“稲葉”（藤枝）の地があり、またその後移動したとされる三重県や和歌山県は西側にあり、かつ、その途中で舞坂の地がある。

従って、静岡県から三重県に向かう太平洋側の出来事だと考えると、行程の順路と共に、極めて自然に神話が理解できる。

【蘇らせる力とその源泉】

神話に基づく大国主命の蘇りの力は、現在に至ってもこの地に潜在的にあるように思える。日本の歴史の中で、その発展の要となった東京、大阪、それを結ぶ東海道の間接点に位置する舞坂の地は、古代から近世の時代、そして戦後に於いても復活の大動脈となり続けたのは確かである。

時に天変地異により、弁天島や舞坂港の周辺は海に没したり、淡水湖であった浜名湖が海水と混じる汽水湖になったり、この地の住人は表現できない様な驚きと絶望の時を過ごしたと思う。しかし毎回復活を遂げてきた。

その源泉は、まさに岐佐神社の二人の命（みこと）の存在かもしれない。蛸貝比賣命（きさがいひめみこと）はアカガイの神、蛤貝比賣命（うむかいひめみこと）はハマグリ（ハマグリ）の神であり、この舞坂や弁天島の青く澄んだ浜辺の守り神である。



（観光地としての弁天島）

天変地異により地形が変わっても、現在も舞坂や弁天の港ではアサリを主体とした魚介類の漁が営まれ続けている。観光などでこの地を訪れたときには、地元の海産物を食することにより、蘇る力、復活する力など、不撓不屈の気力を身に付ける事ができるかもしれない。

〔周辺所在地〕

〒431-0211 静岡県浜松市西区舞阪町舞阪1973（岐佐神社）

2

内浦と曾許乃御立神社・編

出雲の国譲り神話の舞台は浜名湖か！

■曾許乃御立神社と古代浜名湖の出来事

浜名湖北部の内浦（舘山寺）の東に曾許乃御立（そこのみたち）神社がある。この神社は現在の茨城県にある鹿島神宮の祭神である武甕槌神（タケミカヅチ＝建御雷神）が、白鹿に乗って大和に向かう途中に、根本山に立ち寄った際に造られた神社とされている。神社と関係の深い根本山は曾許乃御立神社から約2 km離れた北側にあり、山の麓は古くからの大規模古墳群であった。

曾許乃御立神社の社（やしろ）の参道は、浜名湖の内浦（舘山寺）の浜辺に向いており、古代、この地域一帯は、内浦の湾から北東に広がる大きな文化圏が存在し、日本建国神話の国譲りや神武東征に深く関係したようである。

それを裏付けるかの如く、古事記に出てくる出雲の国譲り神話の地名や情景がこの周辺に残っているのである。この地でも国譲りがあったのだろうか。

まさに浜名湖ロマンである。



（舘山寺のある内浦。中央が根本山）



（曾許乃御立神社境内）

【蘇らせる力とその源泉】

古事記の中の国譲り神話は大変有名であるが、これには謎が多いようである。

大国主命が自ら造った“クニ”を、本当に話し合いで国を譲ったのだろうか。それにしても子供達が辺境の地へ追いやられ、大国主命が極め

て不自然に祭られている事実は、何を物語るのだろうか。

ここでは詳細は省くが、円満に国譲りがなされたのではなく相当な争いの後、勝者側の歴史として、話し合いによる国譲りが創作されたのかもしれない。

不思議なのは、この出雲で起きた国譲りを迫った出来事や地名が、この曾許乃御立神社のある浜名湖北部に存在する事である。

第一には、出雲（島根県）で国譲りを迫った鹿島神宮（茨城県）の武甕槌神が出雲と同様にこの地（曾許乃御立神社＝根本山周辺）に滞在している事である。

第二には、出雲の国譲りで争いの舞台となった地名がこの地にもあることである。例えば“引佐の浜”、“礫岩”（島）、弁天島、更に、出雲大社の建造地である杵築（きづき）は都築（つづき）と重なり合うなど、同じような地名が浜名湖周辺に集中して存在することである。

第三には、国譲りで武甕槌神に力比べを挑み、負けた建御名方神（タケミナカタノカミ＝諏訪大社の祭神）が逃げ延びた先が諏訪湖であること。古事記では引佐の浜のある島根県の出雲から、長野県中部の諏訪湖へ逃げた事になっている。

現在でもどのように行けば良いのかわからないほど、道筋の怪しさを含んでいる。仮に浜名湖が国譲りの舞台であったと考えれば、諏訪湖へは天竜川を通じた道筋（川筋）であり、極めて整合性が取れる。

このように曾許乃御立神社の位置関係を考えると、出雲ではなく、この地で起きたことなのか、或いは両方で起きたことなのか、不思議であり何を意味しているのだろうか。

【神話に関連する船と神社】

信仰という観点から離れ純粹に考えてみると、古くからの神社（社＝やしろ）の多くは、なぜ海岸（水辺）近くにあるのだろうかと疑問を持つ。鹿島神宮、香取神宮、出雲大社、伊勢神宮、そして曾許乃御立神社を含めた日本の多くの神社は水辺に存在している。最も古いと言われている奈良県桜井市にある大神神社（おおみわじんじゃ）は、拝殿はあるが本殿を持たず、山が御神体という神社であるが、ここも大阪湾から大和川を遡った水辺近くにある。



(鹿島神宮)



(香取神宮)



(出雲大社)

日本国の成立には東アジアの動乱が大きく関係しているといわれ、大胆な仮説であるが3～4世紀頃までに、徐福伝説が各地にあるように、東アジアから、諸々のルートを通り、いわゆる統治力を持った集団が、船を巧みに扱い日本各地に渡来したようである。その上陸場所が統治拠点となり、かつ統率者の祭祀に関わることで、原始的な“社＝やしろ”のようなものが生まれ、今日に至ったのではないだろうか。こう考えると水辺にある事が当然と考える。

魏志倭人伝によると、日本では卑弥呼の時代以前から百余国のクニがあるとされており、東アジアの動乱により長い年月の中で、異なる部族の渡来が繰り返し行われ、後にそれぞれが“クニ”という形に至ったのではないだろうか。そしてこの異なる部族の渡来こそ、日本神話を複雑にしていると考えられる。

余談であるが魏志倭人伝に出てくる卑弥呼（ひみこ）と争をしていた最大の“クニ”である卑弥弓呼（ひみここ＝狗奴国の男王）の地と言われるのが東海地方という説もあり、浜名湖はそれに大きく関わりを持っていたと思われる。

当時、渡来に関しても、統治に関しても船の存在は重要で、伊勢湾に面した松阪の前方後円墳からは、日本最大の船の埴輪が出土しており、当時、東海の海を駆け巡っていたことがわかる。



(2000年に宝塚古墳から出土＝松阪市文化センター・はにわ館)



(船尾部)

古代においては馬や牛が日本に存在していないと言われており、山や谷のある陸上移動は難しく、水際や水上交通が当時の人々にとって重要な移動手段であり、港付近は政（祭りごと）の重要な拠点であったと考えられる。

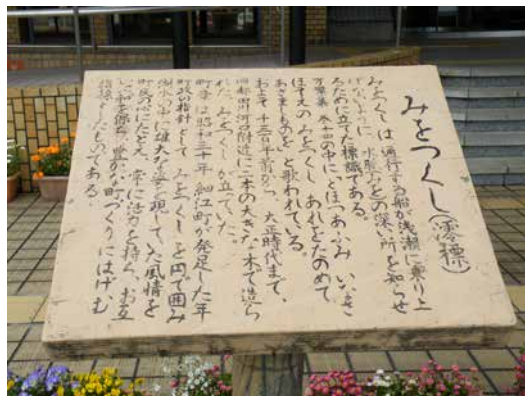
こうした点から当時は現代人が考える以上に、船や操船技術は発達していたものと思われる。例えば、縄文時代でも既に神津島（東京都）の黒曜石が生活用具として静岡県に運ばれており、神話の中でも鹿島神宮（茨城県）の武甕槌神が国譲りの為に天鳥船（あめのとりふね）に乗り出雲（島根県）に出かけている。

確かめる事はできないが、神社の鳥居は船の船首や船尾を表したものではないかという説を聞いたことがある。確かに船の埴輪を見るとそのように思えなくはない。また、曾許乃御立神社の名も“船の底から御立（出発する）”という考えもあった。そうした船の関係からか、現在でも祭事として御船祭（みふねまつり）が行われている。いずれにしても曾許乃御立神社は当時の浜名湖周辺の重要拠点であり、日本の建国に何らかの関与があったものと思われる。

【神話に関連する船と神社】

浜名湖の北の引佐の浜には漣標（みおつくし＝浅瀬を示す標識）が1300年前からあり、引佐町の町章になっている。不思議にももう一つ存在する。古代に渡来船が多く寄港した難波（大阪湾）であり、今の大阪市の市章が漣標である。

漣標があるという事は地形を知らない遠方の船の出入りが盛んであるという事であり、難波が畿内を中心とした日本の建国に大きく寄与したことはよく知られている。そうした事から、国譲り神話の事柄を含めて考えると、引佐の浜に近い曾許乃御立神社付近でも同じような状況が生まれていたと考えられる。



（細江湖の引佐の浜にある漣標＝みをつくし）

そこで浜名湖を含めた古代の東海地方に思いを馳せると、次のような大胆な仮説が頭に浮かぶのではないだろうか。

浜名湖畔の引佐の浜の東から広がる大地は、縄文時代から弥生時代にかけて原日本人が暮らしていた土地柄である。弥生時代の後期には日本において、最も銅鐸を主体とした文化圏が広がっていたと言われている。

一方、東アジアに目を向けると、大陸に於いては動乱が続き比較的高い文化を持った多くの人々が新天地を求めて船を使い、海を渡ったと思われる。

それらの人々は太平洋側から日本へ、そしてまた、朝鮮半島や日本海側から日本のいずれかの地に上陸し、部族単位で国を造ったものと思われる。

既に土着していた原日本人は、高い文化を持つ人々の中に、自然と同化や吸収されていったものと考えられる。

日本海側から来た一部族が大国主命かもしれない。古事記では大国主命が出雲を平定し、その後、畿内や東海を統治し国造りが完成したとされている。

しかし別部族のアマテラス大神が現れ、自分の孫が日本国を統治するので、国を譲れという話になり、上陸場所が異なる同族の鹿島神宮の武甕槌神を出雲に派遣して、統治がアマテラス側に移るのである。

この出来事の舞台が浜名湖と考えると、埴輪で表現された船が、鹿島（茨城県）から船団となって遠州灘に着き、浜名川を通り浜名湖の内浦（舘山寺）に入り、上陸して曾許乃御立神社付近に拠点を構えた。そして根本山から引佐の浜を見下ろし、都田川周辺から広がる大国主命の統治地に、国譲りを迫ったのではないだろうか。

やがて戦となり大国主命の息子である建御名方神（タケミナカタノカミ＝諏訪大社の神）が負け、天竜川沿いに退却し源流である諏訪湖で降伏したのではないだろうか。そしてこの戦で亡くなられた武将達は根本山に埋葬され、現在まで根本山古墳群として残っていたのではないか。

曾許乃御立神社を拠点とし軍船が内浦（舘山寺）から細江湖に入り、都田川を遡上する様子は、近くの山々からは見えたのだと思う。時代を経て、人々が平和に暮らす現在では、この出来事も一つの時代の流れだったのかもしれない。

今も残る曾許乃御立神社の鎮守の杜には、力強く枝を伸ばした御神木がある。その下に立ち、御立（みたち）という新しい未来に向かうこと